

天理大学附属天理参考館所蔵 伝富雄丸山古墳出土三角縁神獸鏡の新たな所見と来歴

I. 新たな所見

(1) 鏡面の痕跡

○天理参考館では伝富雄丸山古墳出土とする3面の三角縁神獸鏡（目録番号I・30・56）を所蔵している。

○目録番号Iと30の鏡面には、副葬されていた時に、ほかの鏡が重なっていた痕跡が認められる（写真下段白色の線）。痕跡の直径から推定して、I、30、56の順に重なっていたと考えられる。

○最も上になっていたことになる56の鏡面には、ほかの副葬品の痕跡が数箇所認められる。

○そのひとつは勾玉のような形を呈し（写真下段黄色の線）、この形の副葬品が長期間上に乗っていたことがわかる。

○京都国立博物館所蔵の富雄丸山古墳出土品のなかに、ほぼ同形同大の銅板が2点ある（下中央）（京都国立博物館館蔵品データベース <https://knmdb.kyohaku.go.jp/19151.html> に掲載）。鋸の痕跡から、この2点は副葬時には重なっていたことが判明している。

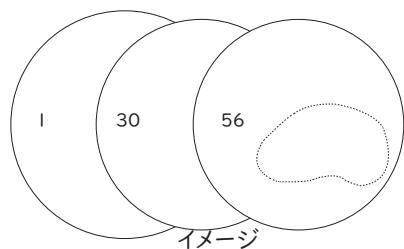
目録番号I



目録番号30



目録番号56



縮尺不同 背面と鏡面の方向は一致していない

京都国立博物館所蔵 富雄丸山古墳出土銅板

（京都国立博物館 京都国立博物館蔵富雄丸山古墳 西宮山古墳出土遺物』1982より）

(2) 痕跡についての調査と所見

○ 2026年1月13日 京都国立博物館において、鏡面の勾玉形痕跡箇所に銅板が重なっていたと仮定して照合を行い、以下の所見を得た。

- ・銅板の形と鏡面の痕跡の形はほぼ一致する
- ・鋳や変色の状態が一致する箇所がある
- ・銅板には湾曲が認められるが、それは土圧により鏡面の形状に応じて生じたものであると考えられる

○以上の所見と、このような勾玉形の銅板はほかに類例がないことから、天理参考館所蔵の三角縁神獸鏡は富雄丸山古墳から出土したものである可能性は高まったと考える。

2. 富雄丸山古墳出土品に関する記録

○～昭和10年 守屋孝蔵（京都の弁護士・コレクター 明治9～昭和28 1876～1953）が下記2件を入手。同時かどうか不明

○昭和10年（1935）8月3日 重要美術品指定

所蔵者 守屋孝蔵

・伝奈良県生駒郡富雄村丸山古墳出土品（仮に1）

銅製画象帶龍虎鏡 1 （※目録番号1）

銅製獸帶五神四獸鏡 1 （※目録番号56）

銅製四神四獸鏡 1 （※目録番号30）

吾作明竟云々ノ銘アリ

・奈良県生駒郡富雄村大字大和田丸山古墳出土品（仮に2）

銅製鉤形金具 1

滑石製鑿形模造品 1

滑石製やりがんな形模造品 1

銅板薄板 2 （※勾玉形銅板）

滑石製刀子模造品 6

滑石製斧頭模造品 9

滑石製鍬形石 2

碧玉製盒 2

石製琴柱形石 12

管玉 17

※下線で示したとおり、出土地の記載が若干異なっている。

○昭和25年（1950）末永雅雄『大和の古墳』より

「発掘は5, 60年も以前（1900年：明治33年）」

「現状を見た人の話によると、表土下8尺位で刀が出てそれから礫層があり、そのまん中の粘土の部分に遺物がきれいに並べてあったとう。」

○昭和28年（1953）守屋孝蔵没 所蔵品は5人の子供が分けた

○昭和30年（1955）6月29日 天理参考館が古美術商より1を購入「守屋孝蔵旧蔵」となる（重要美術品の指定書は伴っていない）
外箱の箱書き

奈良県生駒郡富雄村丸山古墳出土

重要美術 銅製画象帶龍虎鏡

銅製獸帶五神四獸鏡

銅製四神四獸鏡 三面

内箱 箱書きなし

○昭和32年（1957）2月19日 2が津田佳代（守屋孝蔵の娘）名義で重要文化財指定

○昭和33年（1958）4月1日 津田佳代が2を京都国立博物館に寄託

○昭和43年（1968）9月5日 京都国立博物館が2を購入

内箱蓋裏の箱書き

明治ノ末葉奈良県生駒郡富雄村字大和田丸山古墳出土

○昭和43年（1968）『奈良市史』より 末永雅雄

「保坂三郎氏に文化財保存委員会の記録を送っていただき、また遺物に基づいて記した」

「旧所蔵者守屋孝蔵氏は石製模造品類の他に伝帶解付近の古墳出土という漢鏡とともに私によく話されたが、出所については確認されたような話がなかったから、むしろ地元の古老に聞く方が真相をつかみやすいと考えて努力したこともあるが、徒労に帰した。」

○昭和47年（1972）奈良県教育委員会が富雄丸山古墳を発掘調査

出土した石製品の破片が京都国立博物館所蔵2の1点と接合することが判明

○昭和48年（1973）亀井正道「琴柱形石製品考」（『東京国立博物館紀要』第8号）

「発掘は明治末葉である」

○昭和57年（1982）京都国立博物館『富雄丸山・西宮古墳出土遺物』

「明治12・13年頃におこなわれたという発掘」

※波線で示したとおり、明治期に行われた発掘は幾度かに渡る可能性がある